

フリードリヒ・ハイラーの宗教学と宗教運動

宮嶋 俊一*

1. はじめに¹

ヨハン・フリードリヒ・ハイラー (Johann Friedrich Heiler, 1892-1967) はルドルフ・オットーやファン・デル・レーウらと並び、ワイマール共和制期を代表する宗教学者であり、古典的宗教現象学を代表する研究者のひとりとされてきた。また、礼拝・典礼改革運動やエキュメニズム運動を志向したドイツ高教会運動では、指導的な役割を果たしてきた。さらに、その活動期間は第二次世界大戦後にも及び、IAHR (国際宗教学宗教学史学会) においても重要な役割をはたしてきた。ただし、その学問的成果に関しては、キリスト教中心主義的で神学的な色彩を強く帯びているとの批判も受けてきた。

本稿では、ハイラーの生涯とこれまでの評価について簡単にまとめた後、第二次大戦前における高教会運動の活動について、次にそれが継承された戦後の IAHR における活動について、さらにそうしたハイラーの活動の特徴を顕著に示すと言える日本訪問について紹介することで、従来のハイラー理解にいわば「加筆」を加えていきたい。

2. ワイマール共和制期の宗教学者としてのハイラー

2.1. ハイラーの生涯とこれまでの評価

まず、ハイラーの生涯について簡単に触れておく。ハイラーは 1892 年ドイツ、ミュンヘンで敬虔なカトリックの家庭に生まれた。ミュンヘン大学に学び、マールブルク大学神学部で長年活動したが、戦前・戦中の一時期グライフスヴァルト大学に異動、また戦後の一時期、マールブルク大学の哲学部に所属し哲学部長も務めた。マールブルクを定年退官後は、ミュンヘン大学員外教授を努め、1967 年ミュンヘンで没した。

次にハイラーの宗教学者としての業績を振り返っておく。彼はワイマール共和制期を代表する「宗教学」者、「神学」者、宗教運動家とされる。だが、後述するように宗教学者としてはキリスト教神学的であると批判され、逆に神学者としては、カトリック・プロテスタント両「正統」神学 (ここで言う「正統」とは制度的に正規とされる、という意味) に属していなかった。つまり、ハイラーはデラシネとして、宗教学者になりきれなかった宗教学者、神学者になりきれなかった神学者であり続けた。

宗教学説史的には、代表的著作として『祈り』(Das Gebet, 1918)²と『宗教の現象形態と

* 北海道大学大学院文学研究院教授

¹ 本稿は「ハイラー宗教学再考」『北海道大学文学研究院紀要』(168) 37-54 頁, 2022, および「ドイツ高教会運動とハイラー宗教学の形成」『北海道大学文学研究院紀要』(172) 93-105 頁, 2024 を再構成し, 加筆修正したものである。

² Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religionspsychologische Untersuchung*, Reinhardt, München 1918 (5. Aufl. 1923).

本質』(*Erscheinungsformen und Wesen der Religion*, 1961)³という2つの宗教(現象)学的著作をものした⁴。1918年、26歳の時に出版された『祈り』は1923年に増補第5版が出版されており、そのことから当時、人口に膾炙していたことがわかる。もう一つの宗教学的大著とされる『宗教の現象形態と本質』は1961年、69歳の時に出版されている。こうしたことから、ハイラーは息の長い学者であったとすることができるが、それに加えて「宗教学的」とされる大著が青年期と晩年に出版されているという点も特徴的であろう⁵。

では、その間の活動はどのようなものであったのか。まず、1920年代の活動としては、ローマ・カトリック教会(とりわけイエズス会士たち)との論争が挙げられる。また(本稿では詳細に触れることはできないが)インド人宣教師スンダー・シングをめぐる論争にもエネルギーを注いでいた⁶。前者の活動とのつながりで言うと、既存の教会制度を越えた活動として、後述する「ドイツ高教会運動」で(創始者ではないが、そうであると誤解されるほど熱心に)指導的役割を果たしてきた。1920年代における執筆活動の基盤はこのドイツ高教会運動が発行していた雑誌("Hochkirche", 後年に "Eine heilige Kirche"とタイトルが変更された)である。

第二次世界大戦中は活動が大幅に制約された。所属に関して言えば、上述の1934年から35年にかけてのグライフスヴァルトへの異動や戦後の哲学部への所属の変更などは、本人の意志に反した「左遷」であるとされている。

戦後は、IAHRなどで活躍、1958年の東京大会、1960年のマールブルク大会では重要な役割を果たした。また、宗教学の実践的役割(諸宗教の協調・協働)を強調し、そうしたテーマでの論考を多く発表している。そして晩年(から死後)において、ハイラーが棹さしていた宗教現象学はクルト・ルードルフらによって厳しい批判にさらされることとなる。

2.2. 従来のワイマール共和制期ドイツ宗教学の理解

次に、ハイラーの宗教学的な業績を当時の時代状況の中に位置づけていく。従来のワイマール共和制期ドイツ宗教学の理解は、以下のようなものとなる。すなわち、1917年ルドルフ・オットーの『聖なるもの』が、また1918年ハイラーの『祈り』が出版され、さらに1920年にはマールブルク大学福音主義神学部と比較宗教史の講座が設置され、ハイラーが助教授として着任した。そうした動きから、この時期は宗教学の発展的形成期と捉えられてきた。さらに、宗教現象学研究の立場からは、オットー、ハイラー、いずれもが(キリスト教以外の)諸宗教の存在を肯定的に認めつつ、(可視的な)諸宗教現象の背後に宗教の本質(核)

³ Heiler, Friedrich, *Erscheinungsformen und Wesen der Religion*, W. Kohlhammer, Stuttgart 1961.

⁴ そうした見方は、例えば Bleeker, Claas Jouco, *Die Bedeutung der religions-geschichtlichen und religions-pänomenologischen Forschung Friedilch Heilers*. *Numen*, XXV, 1978, S.2-16.に示されている。

⁵ もちろん、これら2著作が「宗教学」的であって、それ以外の著作が「キリスト教神学」的である、といった単純な腑分けはできない。その点については、本稿において後述する。ただし、扱われている対象がキリスト教のみであるか、それとも諸宗教現象の比較が目指されているのか、といった違いはやはり存在しており、この2著作を「宗教学」的と見なすことに一定の根拠があることも確かである。

⁶ 拙著『祈りの現象学—ハイラーの宗教理論』ナカニシヤ出版、2014を参照。

と呼びうる何かが存在するとして、その内実を明らかにすることを課題としており、そうした意味では 1910 年代の終わりから 20 年代にかけて、宗教現象学的な比較宗教学が制度的にも実質的にも形成されつつあった、という見方が示されてきた。

しかし、オットーは福音主義組織神学者であり、自らもそのことを自覚していた。そして自由主義的な福音主義の影響力が弱まりつつある中、彼が向き合っていたのは、当時台頭しつつあった弁証法神学の動きである⁷。オットーに対しハイラーはカトリック出自であり、若き日にはカトリックの聖職者になることを夢見ていた。当時のローマ・カトリック教会の教皇中心主義的な動きに反発する聖職者・神学者たちが近代主義者（モダニスト）として公的領域から排除されていく中で、ハイラーが向き合っていたのはローマ・カトリック教会（とりわけイエズス会士たち）であった⁸。

つまり、同じマールブルク大学の神学部に所属し、宗教学の発展的形成期を担っていたとされつつも、2人は異なる「敵」に向き合っていた。もちろん、ハイラーがオットーと敵対していたということではなく、少なくともハイラーはオットーの学説を肯定的に継承している。ただ、共有すべきものは共有しつつも、「見ている方向が違っていた」ということである。

なぜこの2人が「セット」と考えられていたのかと言えば、ナータン・ゼーデルブロムの存在が大きい。すなわち、ゼーデルブロムが両者の橋渡し役を果たしていた⁹。ハイラーが聖職者への夢を諦め宗教学へと「転向」した背景にはゼーデルブロムの影響が大きく、それと同時にオットーとも親交のあったゼーデルブロムが2人の中に入ることで形成されたトリアーデが宗教現象学形成のメルクマールとされてきた。

このようなこのワイマール共和制期ドイツ宗教学に対する評価は、第二次世界大戦後に形成されてきたものである。かつて G.メンシングはこの時代の宗教学の傾向を「理解の宗教学」と呼んだ¹⁰。そして、その多くが宗教学者であると同時に宗教運動家でもあったことに着目して、R.フラッシュェは彼らを「預言者症候群」に罹っていたと厳しく批判した¹¹。さらに、彼らのキリスト教神学的姿勢を K. ルードルフは「偽装神学」と呼びやはり批判を加えた¹²。

⁷ ちなみに、1921年にはルドルフ・ブルトマンがマールブルク大学神学部で新約聖書学の正教授に就任している。

⁸ Heiler, Friedrich, *Im Ringen um die Kirche (Gesammelte Aufsätze und Vorträge, Band 2)*, Reinhardt, München 1931などを参照。

⁹ Misner, Paul (Hrsg.), *Friedrich von Hügel – Nathan Söderblom – Friedrich Heiler: Briefwechsel 1909-1931*, Bonifatius-Druckerei, Paderborn 1981などを参照。

¹⁰ Mensching, Gustav, *Gesichte der Religionswissenschaft*, Universitätsverlag, Bonn 1948（下宮守之訳『宗教学史』創造社、1970）

¹¹ Flasche, Reiner, *Religionsmodelle und Erkenntnisprinzipien der Religionswissenschaft in der Weimarer Zeit*. Cancik, Hubert (Hrsg.), *Religions- und Geistesgeschichte der Weimarer Republik*, Patmos, Düsseldorf 1982, S.261-276（「ヴァイマル時代の宗教学における宗教のモデルと認識原理」フーベルト・カンツィク編、池田昭・浅野洋監訳『ヴァイマル共和国の宗教史と精神史』御茶ノ水書房、1993、379-380頁）

¹² Rudolph, Kurt, *Das Problem der Autonomie und Integrität der Religionswissenschaft*. *Nederlands Theologisch Tijdschrift* 27, 1973, S.105-131.

だが、こうした批判はキリスト教神学に対抗しつつ宗教学の自律性・自立性を確立するという彼らの目的ゆえのことであったとも言える。ルードルフはハイラーらの活動を「偽装神学」と呼び、そのキリスト教神学的傾向を批判したのだが、一旦は『祈り』や『宗教の現象形態と本質』をハイラーの「宗教学」的代表著作とし（ランツコフスキー、プレーカー、ヴァールデンブルクら）、その上でそれを「キリスト教神学的」と批判するということは、（ルードルフら）自らがキリスト教神学と対峙しつつ、宗教学の自律性・自立性を説いた「宗教学」者が、そうした批判により自らの学問的アイデンティティを確保しようとしたと言うこともできる¹³。また、学説史的にというだけではなく、神学部内部に存在していた宗教史学科の自律・自立（人事権など）を主張することは、自らのアイデンティティを確立するために必要な態度でもあった。

しかし、そうした見方、つまり既述の二著作を「宗教学」者ハイラーの代表的著作とする一方、そうしたハイラーの宗教学的成果を「神学」的であると批判するような見方は、一種の歴史的再構成であるとも言える。両著作の間の期間に何が行われていたのか、それを確認することが必要である。また、キリスト教神学を対抗軸とした記述的・客観的な宗教学の確立というスローガンを掲げることが困難となった現在、そうした批判のみならず、学問史的な観点からその生成プロセスをあらためて迎える作業が必要である。本稿はそうした視点からハイラーの宗教学と宗教活動について検討をさらに進めていく。

3. 戦前から戦中にかけての活動

ハイラーの活動は、戦中期に休止させられたため、（内実としては重なるところも多いが、形式的には）戦前と戦後に大別できる。

戦前の活動に関して述べると、上述のように、1918年に主著となる『祈り』を出版し1920年にマールブルク大学神学部に着任した時期がハイラーの学術活動の起点と言えるが、さらに1931年から正式に関わることとなったドイツ高教会運動はハイラーにとって重要な意味を持つ。

3.1. ドイツ高教会運動

ここでドイツ高教会運動について簡単に説明を加えておく。「高教会（Hochkirche／High Church）」という用語は、18世紀初頭の英国で生まれたものであり、宗教改革の時代から英国国教会の中に存在する福音主義的な教会の特質を指す。この教会性は、神学的・教会学的にピューリタニズムやローマ・カトリシズムとは区別される。高教会派はローマ・カトリック教会から独立したアングリカニズムを提唱する一方、司教団の体制と聖餐式に関する保守的な教義は守ろうとし、その動きは19世紀にオックスフォード運動という形で大きな影響力を持つようになった。

イギリスの高教会と並んで、20世紀ドイツ・ルター派でも同様の動きが生じた。きっかけは、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の牧師、ハインリッヒ・ハンセン（Heinrich Hansen,

¹³ 拙稿「宗教現象学批判とその後」『宗教研究』第91巻別冊，2018，173-174頁。

1861-1940) が、1917年に発表した論文「Stimuli et Clavi (Spieß und Nägel)」（槍と釘）である。この論文の中で、ハンセンは自分が関わっていた領邦教会を批判し、「悔い改めて、福音によって定められたカトリック性に戻るように」と呼びかけた¹⁴。そのハンセンは、1918年に「高教会同盟 (Hochkirchliche Vereinigung)」を創設する。

この運動の目的は継承性（教義や告解、典礼や教会組織の面で初代教会との時代を超えたつながりを重視）、エキュメニズム（国教会やローマ教会など、特定のキリスト教宗教共同体に限定されることのない、唯一の聖なる普遍的なキリスト教会を意識し、東西の分裂を克服することを目指す）、実在性（高教会の想定する教会性は実在する教会として顕れる）の3つをスローガンとし、それらが「カトリック性」としてまとめられている。その活動は福音主義教会のカトリック化を目指し、具体的には、完全な聖体拝領の再導入、聖務日課、聖人崇拜、告解制度などの要求を掲げた。

ただし、運動はこのような制度的枠組みを要求しながらも、現実的には特定の宗教共同体の創設を目指してはおらず、あくまでこうした理想を追求する人々の集まりであった。この運動はエキュメニカルな志向を持ったキリスト教改革運動であり、プロテスタンティズムにおいて聖体拝領などカトリック的要素を重視しそれに基づき典礼・礼拝の改革運動にも積極的に取り組んだ。『高教会 (Hochkirche)』（後に『一つの聖なる教会 (Eine Heilige Kirche)』とタイトルを変更する) という機関誌を刊行し、ハイラーは長くその編集長を務めた¹⁵。

ハイラーにとってのドイツ高教会運動の意義のひとつは、1918年に出版された『祈り』において説かれた「祈りの理想」を実現するための実践的な活動の場としての意義である。すなわち、ドイツ高教会運動において目指された新たな典礼・礼拝の創設は『祈り』の延長線上に位置するものであり、ハイラーの宗教的・宗教学的活動はその「理論と実践」において理解される、というものである。その意味で、今日のわれわれからすれば、宗教学からの逸脱に見える宗教活動は、ハイラーにおいては学問的活動とは矛盾せず、一貫していたと考えられるが、この点についてはさらに第4章で深く掘り下げていく。

本章では、もうひとつ、別の意味について論じたい。それは、ハイラーの1930年代の活動拠点としての意味である。というのも、1930年代のハイラーの著述活動のスタイルは機関誌『高教会』で論文・評論を次々に発表し、それをまとめて著作化し、Ernst Reinhardt社から刊行するというものであったからである。

¹⁴ Hansen, Heinrich, Stimuli et Clavi - Spieß und Nägel. *Virzig Jahre Hochkirchliche Bewegung in Deutschland und in Nachbarländern. Sonderheft der Zeitschrift "Eine heilige Kirche" II*, 1957/58, S.126f.

¹⁵ ハイラーのドイツ高教会運動での活動については、Niepmann, Helmut Martin, Professor Friedrich Heiler und die Hochkirchliche Vereinigung. Haut, Theodor / Kisker, Ursula (Hrsg.), *Siezig Jahre Hochkirchliche Bewegung (1918-1988). Hochkirchliche Arbeit. Woher? – Wozu? – Wohin? (Eine heilige Kirche NF 3)*, Bochum 1989, S. 55-89, および、Langfeldt, Jan, *Die hochkirchliche Bewegung in Deutschland und die Eucharistiefeyer der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft von 1931: Unter besonderer Berücksichtigung des Offertoriums*, Grin Verlag, München 2007 を参照。

先取りして言うと、カトリック出自のハイラーが、信仰上の理由でプロテスタントへと「改宗」し、マールブルク大学プロテスタント神学部に着任したが、カトリックへの「郷愁」断ちがたくそこで孤立する中で、新たな活動の場を求めた結果、当該運動にたどり着き、さらにはそこを出版活動の拠点としていった、という筋書きとなる。またその結果、ハイラーの「宗教学」が、今日の私たちが考える意味での宗教学ではなく、より実践的な活動として形成されていったことも指摘したい。以下、ハイラーのライフストーリーと重ねながら、ハイラーの活動内容を具体的に示し、分析を加えつつ、彼独自の宗教学が形成されていく、その一端を見ていく。

3.2. 1920年代前半におけるハイラーの活動

1918年に『祈り』を出版したハイラーは1920年、マールブルク大学神学部に助教授として着任する。それに先立ち、カトリックからプロテスタントへと「改宗」とされるが¹⁶、この時期（1920～25年）は雑誌『キリスト教世界』を活動の場としていた。同誌には継続的にハイラーの論文が掲載されているが、同誌の編集を務めていたマルティン・ラーデはマールブルク大学神学部教授であり、「文化プロテスタンティズム」の代表者と位置づけられてきた人物である。ハイラーとラーデがどのような関係にあったのか、その詳細についてはまだ調べ切れていないが、少なくとも同誌に少なからぬ論考を發表することが可能であったことは明らかであり、それだけでなくその頻度や分量からして1920年代前半のハイラーにとって『キリスト教世界』誌はその活動における重要な位置を占めていたと言える。

1920年には「一般宗教史におけるキリスト教の絶対性（Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte）」というタイトルの講演録¹⁷が同誌に掲載される。トレルチの「キリスト教の絶対性と宗教の歴史」を彷彿とさせるこの論考は、宗教史におけるいわゆる「平行理論」に基づきつつ、諸宗教に対するキリスト教の優越性を説いた論考であり、主張そのものは護教的であるが、少なくともその手法において当時の宗教史理論に依拠した、学術的性格を有した論考であると言えよう。

また、1923年には、同誌上において、インド人宣教師スンダー・シングに関する論考を發表している¹⁸。この論考は、ハイラーがスンダー・シングというインド人宣教師の活動や言動に、プリミティブなキリスト教の理想を見出し、イエス・キリストの再来とまで高く評価したのだが、一方でその言動を虚偽として否定し、スンダー・シングは虚言癖のある精神病者に過ぎないと主張したプフィスターとの間で論争を引き起こすこととなった。すなわち、この論争の端緒となった論考が、同誌に發表されているのである。実践的な性質を有した論考であり、スンダー・シングの宗教的（キリスト教的）「真実性」を主張するという意味では神学的とも言えるが、その論証の手続きで宗教史的な知識を援用している点にお

¹⁶ 1918年10月13日付けゼーデルブロクからオットーに宛てた手紙を参照。Misner, Paul (Hrsg.), *Briefwechsel*, S.309.

¹⁷ Heiler, Friedrich, *Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte*. Vortrag in der Religionswissenschaftlichen Gesellschaft zu Stockholm (1919). *ChrW*, Vol.34, 1920, S.226-230, 244-248, 258-262.

¹⁸ Heiler, Friedrich, *Sadhu Sundar Singh, der Apostel Indiens*. *ChrW*, Vol.37, 1923, S.417-483.

いて、(少なくとも当時の学問状況においては) 宗教(史)学的であることが目指されていると言える。

このように、『キリスト教世界』に掲載されたいくつかの論考は、護教的・神学的・実践的な傾向を持ちつつも、その手続きにおいて「宗教学」的であることが目指されていた。

3.3. 1920年代半ばにおけるハイラーと高教会運動との関わり

『キリスト教世界』誌 1925年10月号には、8月にストックホルムで開催された「ライフ・アンド・ワーク世界会議」の報告が掲載されている¹⁹。このライフ・アンド・ワーク世界会議は、エキュメニカル運動の潮流に棹さすものであり、教派を超えて経済や政治、道徳などを含む社会問題に関する諸教会の協力について話し合う会議で、ナートン・ゼーデルブルムの主導で開催された。ゼーデルブルムはこの会議以前から、エキュメニカルな対話の促進や、第一次世界大戦の和平交渉に関わっていた。カトリック教会は参加しなかったが、それ以外の多くの教派がこの会議に参加した。ハイラーはこの会議で開催された礼拝の様子などについて、詳細に報告している。

興味深いのは、この報告が『キリスト教世界』だけでなく、ドイツ高教会運動の機関誌『高教会』にも掲載されたことである²⁰。当時、キリスト教(とりわけプロテスタント)世界で大きな影響力を持っていたゼーデルブルム主催の国際会議の報告が『キリスト教世界』に掲載されることは不思議ではないが、同時にエキュメニカルな志向を持っていた高教会運動の機関誌にも同じ報告(短縮版)が掲載されたのである。結果的にこの報告はハイラーが活動の場を『キリスト教世界』から『高教会』へと移す、その嚆矢になった論考とも言える²¹。

さらに、『高教会』1926年の1月号からは、前年12月にマグデブルクで開催された高教会同盟会議でのハイラーの講演が掲載され²²、この時期から、ハイラーが高教会運動に接近していることがわかる。

3.4. 1920年代後半のハイラー

1920年代後半、ハイラーはマールブルク大学プロテスタント神学部で孤立する。その(重要な)理由のひとつは、プロテスタントに「改宗」したと言いながらも、カトリックへの「郷愁」を断ち切ることができず、プロテスタント的な環境に馴染むのが難しかったことである。1927年8月3日付けの、妻、アンネ・マリー・ハイラーからゼーデルブルムに宛てた手紙には、以下のような内容の記述が存在する。すなわち、ハイラーがマールブルク大学プロテスタント神学部で孤立していること、そのことを同僚であるオットーが心配し、ゼーデルブ

¹⁹ Heiler, Friedrich, Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz. *ChrW*, Vol.39, 1925, S.865-875.

²⁰ Heiler, Friedrich, Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz. *Hochkirche*, Vol.7, 1925, S.359-363; Vol.8, 1926, S.118f.

²¹ なお、「Jahrbuch für Liturgiewissenschaft」と題された典礼学の年報を紹介した文章も、1924年は『キリスト教世界』に掲載されていたが、その後は『高教会』での掲載に変更されている。

²² Heiler, Friedrich, Evangelische Hochkirchentum. Vortrag auf der Tagung der Hochkirchlichen Vereinigung in Magdeburg 1.Dezember 1925. *Hochkirche*, Vol.8, 1926, S.2-16, 36-46, 68-74.

ロムに相談するよう（アンネ・マリーが）オットーから言われたこと、1927年8月に開催されるローザンヌでの国際会議の終わり頃（8月18日～20日頃）に、夫、フリードリヒと話をし、彼を助けてくれないだろうか、という相談が記されているのである²³。

そうした状況に呼応するかのように『キリスト教世界』への文章掲載の機会は失われていく。そして、それに代わって、文章発表の場として重要な意味を持ち始めるのが『高教会』である。1930年以降、1940年の発刊停止まで、『高教会』（1934年からは『一つの聖なる教会』とタイトル改変）に占めるハイラーの文章掲載量は圧倒的となる。その内容は概ね、典礼・礼拝改革に関わる文章、エキュメニカル運動に関わる文章、そして膨大な書評が含まれる。結果的に、狭義の宗教学的（あるいは宗教史的）な論考は減り、高教会運動に関する実践的論考が増加していくこととなる。

3.5. 小結

本章において確認したかったのは、1920年代においてハイラーの著述活動の場が『キリスト教世界』から『高教会』へと移行したということ、その理由として考えられるのがハイラーのカトリック教会への「郷愁」、マールブルク大学でのハイラーの孤立、その状況を脱するための高教会運動への接近、そしてエキュメニカル運動や典礼・礼拝改革運動への積極的な参加、といったハイラーの置かれた状況や活動内容の変化である。さらにハイラーの後ろ盾ともなっていたナータン・ゼーデルブロムは1931年に死去する。彼の死去によりハイラーはプロテスタント世界でますます孤立を深めていった可能性は高い。そうした中、ハイラーはドイツ高教会運動への関わりを深め、教会史に関する著作を多く執筆する一方、一般宗教史・宗教学に関する著作はほとんど書かれなくなっていく。そして、ハイラーの活動の基盤となっていた『高教会』の出版がナチス政権によって禁止されたことによって、ハイラーの第二次世界大戦前の活動は停止することとなるのである。

もし、ハイラーがプロテスタント世界に馴染み、そこでの活動を継続し、またそれが周囲からも認められ、結果、プロテスタント出版界に活動の場を維持し続けていれば、『高教会』に活動の場を求める必要はなかったであろうし、エキュメニカル運動との関わりも深まらなかった可能性がある。そうなれば、『高教会』に発表してきたような実践的・論争的な評論ではなく、むしろ（狭義の）宗教（史）学的論考が多く書かれることになったかもしれない。だがそれが難しかったからこそ、『高教会』へと活動の場が移された。ドイツ高教会運動にコミットしたことにより、ナチズム下においては、その活動を制限されることとなったが、それは、ハイラーがナチズムを積極的に批判したからではなく、国際的な人間関係がその理由であるとされる。いずれにせよ、結果的にナチズムに加担することがなかったため、戦後、公職追放されることもなく、その活動にも支障が出なかった。それゆえ、戦後ドイツの宗教学会において重鎮としての役割を果たすこととなった。

ここまで戦前・戦中期においてドイツ高教会運動がハイラーの活動の場として重要な意味を持ったこと、それが彼自身の置かれた状況とも結びついてきたことを指摘したが、次章では、その活動の内実として重要な意味を持った礼拝・典礼改革について触れ、さらにそれ

²³ Misner, Paul (Hrsg.), *Briefwechsel*, S.321-322.

が戦後の IAHR での活動へとさらに展開していくことを論じていく。

4. ドイツ高教会運動における礼拝・典礼改革と戦後の活動

4.1. 戦前の活動から

ハイラーにおける宗教学と宗教運動の関わりをさらに掘り下げていくために、ここであらためて、1920年代前後のハイラーの活動から検討を始めていくこととする。1919年、ハイラーはゼーデルブロムの招きでスウェーデンを訪問した。そこで行われた講演をまとめて出版したのが『カトリシズムの本質』（1919年、以下『本質』と略記）²⁴である。このスウェーデン訪問では、ハイラーがゼーデルブロムの執り行った聖餐式に参加し、それをもってハイラーは福音主義へと「改宗」したとされる。以下で、この講演集とそれに対する反響、さらにその反響に対するハイラーの応答から確認していこう。

話は前後するが、『本質』の4年後に出版された『カトリシズム』（1923年）²⁵という著作の冒頭には『本質』に寄せられた反響（書評、論評からの引用）がまとめられており、『カトリシズム』が『本質』への応答として書かれたことが説明されている²⁶。『本質』に収められた講演では、「福音主義的カトリック性 (Evangelische Katholizität)」というエキュメニカルなキリスト教の理念が語られるのだが、これはカトリシズムの宗教性・精神性を評価しつつもローマ・カトリック教会の教会制度を批判し、その面で福音主義の「自由さ」を評価するという内容であった。ハイラーは、『カトリシズム』の冒頭で、『本質』に言及した書評・論評の類いを数多く集め、それらの書き手をカトリック側、福音主義側、俗人の立場などに分類、その受け止めを整理・分析し、(その詳細は省くが) 以下のように結論づける。すなわち、「ハイラーは(福音主義に改宗したと言いながら) 未だカトリックへの郷愁から逃れておらず、その理解は一面的であり、よってカトリックと福音主義の乖離を乗り越えるものではない」という厳しいものであった、というのがそのまとめである²⁷。

『祈り』に関する膨大な書評の切り抜きがアルヒーフには保存されている。だがそれらを分類・整理・分析し、続編を出版するという作業は行われていない。『祈り』に寄せられた反応に基づいた新たな祈り論を発表することはなかったのである。その意味で、『本質』の作業を『カトリシズム』へと継続・発展させている点は注目値する。では、『祈り』にはそうした継続・発展作業はまったく存在していなかったのだろうか。この点に関し、『祈り』の祈り論はその後「研究」へと展開したのではなく、むしろ実践活動へと進展していったのではないか、というのが著者の見立てである。つまり、ハイラーの祈りへの関心は継続していたが、それは研究としてではなく礼拝・典礼改革と新たな礼拝・典礼創造へと向かっていったのであり、そのための場がドイツ高教会運動であった。またそれは、『本質』への批判

²⁴ Heiler, Friedrich, *Das Wesen des Katholizismus. sechs Vorträge, gehalten im Herbst 1919 in Schweden*, Reinhardt, München 1920.

²⁵ Heiler, Friedrich, *Der Katholizismus. Seine Idee und seine Erscheinung*, Reinhardt, München 1923.

²⁶ ハイラーのアルヒーフには膨大な「切り抜き」が保存されているが、その中には自著への書評・論評が数多く含まれている。

²⁷ Heiler, Friedrich, *Der Katholizismus.....*, S.1-14.

に対する実践的な応答でもあった（理論的な応答が『カトリシズム』という著作の出版であった）。つまり、「福音主義的カトリック性（*Evangelische Katholizität*）」は新たな礼拝・典礼によって（すべてではないとしても、その一部が）実現したということである²⁸。

このように考えてみることで、ハイラーの活動に一貫性を見いだすことが可能である。つまり、「宗教学的」著作と「神学的」著作、あるいは「宗教学的」活動と「宗教運動」は、ハイラーの中では地続きであったのであり、この姿勢は IAHR へのコミットにも現れてくる（この点については後述する）。

ハイラー個人の宗教的葛藤（カトリシズムから福音主義への改宗）、および『祈り』という著作による成果、さらには『本質』への批判への応答、それらが結びつく形で、1920年代にハイラーの宗教的実践活動が展開していく。具体的に言えば、ハイラーは自らが深く関わったドイツ高教会運動において、独自のミサを作成することとなる。この礼拝・典礼の式次第は、福音主義の礼拝にカトリック的な要素を含めたものである。そして、その課題に応えようとしたのがいわゆる「ハイラー・ミサ」と呼ばれるものであった。

ハイラーは、1929年「高教會的聖ヨハネ兄弟団」（福音主義-カトリック的聖体拝領共同体）を設立、そして1931年に「福音主義-カトリック的聖体拝領共同体の聖体拝領式次第」、いわゆる「ハイラー・ミサ」が公表された²⁹。

そのポイントを指摘しておく、と、「エキュメニカルな礼拝」を目指すため、福音主義で消滅してしまった（聖体拝領など）秘蹟の儀式（それ自身はルターにも存在していたとされる）の神秘を取り戻すと共に、福音主義的な方法、すなわち信徒の母語を用いたり（ドイツ語によるミサ）、会衆の関与が大きかったり、福音主義の賛美歌を用いたり、といった特徴を有していた。その成果は『祈り』の分析や『カトリシズムの本質』で示された「福音主義的カトリック性」といった思想が流れ込み、昇華されていったものと見なすこともできる。

1960年にマールブルクで開催された IAHR 大会において、ハイラーは大会参加者（研究者）にミサへの参加を呼びかけた。そのミサは、ハイラー自身が構想した「ハイラー・ミサ」であった。一方で、この呼びかけは、研究者たちにとって不評であった。IAHR 大会は学術大会であり、宗教者の集まりではない。他方、おそらくハイラーにとって、両者を明確に区別するという意識はあまりなかったのではないかと考えられる。

ここまでをまとめると、『祈り』という著作を（後年の人々が言うところの）宗教学的著作（ただし、キリスト教神学的な色彩を強く帯びている）と捉えるだけではなく、ハイラーが深く関与した高教会運動における礼拝・典礼改革やその宗教思想である「福音主義的カトリック性」と関連付けつつ、礼拝・典礼改革のいわば「序章」として同書を位置づける可能性を示唆した。後年の研究者がハイラーの諸著作を「宗教学的」「神学的」と分類してきたのは、神学と対置される「宗教学」を（両者の関係において）前提としてきたからと考えられるが、ハイラーの活動を全体として捉えていくと、そうした区別はハイラー自身の意図とは異なっている。『祈り』という著作もドイツ高教会運動における活動も、理想とする「祈

²⁸ 拙稿「ワイマール共和制期ドイツの宗教学と宗教運動」『宗教研究』第95巻別冊、2022、98頁。

²⁹ Heiler, Friedrich, *Eucharistiefeier der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft. Hochkirche*, Vol.13, 1931, S.145-162.

り」の追求という意味では一貫しているのである。

では、このようなドイツ高教会運動へのコミットメントは、ハイラーの（狭義の）「宗教学」にどのような影響をもたらしたのだろうか。元々、ハイラーは聖職者になることを夢見ていた。その夢を絶たれたハイラーを支えたものが「宗教学」であった。よって、ハイラーの「宗教学」が偽装神学（ルードルフ）的 なものとなったのも、必然であったと言える。その「宗教学」は、ドイツ高教会運動との関わりを通じて、ますます実践的なものとなっていった。19世紀の後半を宗教学の黎明期と捉えるならば、20世紀前半を宗教学の発展的形成期と位置づけることができるし、本稿もそのような立場で論じられている。そしてこの時期、ハイラーが宗教運動へと傾倒し、アカデミズムでの活動から距離を置いていったが、それは、今日のわれわれからは、宗教学からの疎遠化のように見える。だが、ハイラーにとっては理論と実践を融合させつつ、理想的な宗教のあり方を模索する、いわば「実践的宗教学」を形成していくプロセスであった。そのようにして形成されていった実践的宗教学が戦後において諸宗教間の対話、さらには諸宗教の統合といった主張へと展開していく。

4.2. 戦中から戦後へ

1940年に、雑誌『Hochkirche』が発禁処分を受ける。これは同誌がナチス政権に対して批判的な記事を掲載した、などの理由ではなく、ハイラー自身の国際的な交友関係が原因とされる（ロシアのギリシア正教関係者やイギリスの英国国教会関係者との関わりなどが問題視された）。

1941年には、著作として『古代教会と教皇中心主義』³⁰が出版されたのみで、雑誌記事なども含めて、これ以外の出版物は一切ない。さらに1942年から1946年にかけて、ハイラー自身が執筆した出版された文章は皆無である。戦中の活動がきわめて制限されていたことが、そのことからわかるだろう。

では、戦後の活動はいつ始まったのであろうか。1947年には『カトリック近代主義の父 アルフレッド・ロアジー』³¹一冊が出版されたのみで、雑誌記事なども含めて、これ以外の出版物は一切ない。この書籍は「カトリック近代主義の父」とされるアルフレッド・ロアジーの伝記・解説であるが、戦前、雑誌（Eine heilige Kirche）に掲載された文章を増補したものである。戦後数年は、その活動が停滞していたことがわかるが、そうであっても（正確な執筆時期は不明だが）戦後真っ先に出版されたのがカトリック近代主義に関わる書籍であることから、キリスト教教会のあり方に対する関心が戦前から戦後にかけて一貫していることがわかる。

1948年には高教会運動の雑誌が復刊、活動が再開される。1949年には説教集『ミステリウム・カリタス』³²が出版される。これは1943年から48年にかけて、マールブルクの教会・

³⁰ Heiler, Friedrich, *Die katholische Kirche des Ostens und Westens, II, 1: Altkirche Autonomie und päpstlicher Zentralismus*, Ernst Reinhardt, München 1941.

³¹ Heiler, Friedrich, *Der Vater des katholischen Modernismus - Arfred Loisy(1857-1940)*, Ernst-Reinhardt-Buecherreihe. Erasmus-Verlag, München 1947.

³² Heiler, Friedrich, *Mysterium Caritatis. Predigten fuer das Kirchenjahr*; Ernst-Reinhardt-Buecherreihe. J.&.S.Federmann-Verlag, München 1949.

礼拝堂で行われた説教を集めたものであり、活動休止期とみなしうる期間においても、教会での活動は（細々と）続けられていたことがわかる。さらに49年以降になると、戦前と同様、あるいはそれ以上に活発な執筆活動が行われるようになる。

ここまで、戦中から戦後にかけてのハイラーの活動（正確には、活動が休止した状況）を確認してきた。一方、IAHRの活動に関して言うと、1950年、戦後初のアムステルダム大会が開催された。だがこの大会についてハイラーが執筆した文章は、存在していない。ハイラーが関わるのは、1955年ローマ大会以降であり、さらに1958年東京大会、および1960年のマールブルクでは重要な役割を果たすこととなる。以下でハイラーが記したローマ大会と東京大会の報告を確認することによって、ハイラーのIAHRへの認識を確認していきたい。

4.3. IAHR ローマ大会報告

まず1955年IAHRローマ大会報告³³である。こちらは、やや長めの報告である。ただしその内容の大部分は論評・批評を含まず、文字通りの「報告」となっており、学会の各部会が誰がどのような報告を行ったか、といった記録的な既述が中心である。

冒頭部分には以下のような内容が記されている。まず、IAHRの歴史についてである。19世紀後半における宗教史の興隆は、宗教史学の雑誌の創設と国際会議の開催につながった。最初の会議は1900年にパリで開催された。さらにバーゼル(1904)、オックスフォード(1908)、ライデン(1912)、ルンド(1920)、ブリュッセル(1935)、アムステルダム(1950)と続いた。第8回IASHR(国際宗教史学会)の実行委員会によって準備された宗教史に関する国際会議は、1958年4月17日から23日までローマで開催された。ローマはそのような会議を開くのに特に適していた。なぜなら、古代ローマとオリエント祭儀との出会い、ならびにその始まりから現在に至るまでのキリスト教の発展の双方において、西洋宗教史の大部分がそこにはっきりと現れているからだ。現在学会長はイタリア人で、ローマの国立大学の宗教史学講座の名誉教授であるラッファエーレ・ペッタツォーニだが、当初、このような会議のために必要な国家の支援を獲得することは、簡単ではないように思えた。当然のことながら、影響力を持つ教会の取り巻きは、教皇の前で、宗教問題に関して、教派的に中立的な学会を歓迎しなかった。しかし、ペッタツォーニは困難を克服し、イタリア当局に会議を推進し参加するよう説得したが、哲学、天文学、婦人科などローマで開かれた他の国際学会の場合と同様に、教皇によって会議参加者が受け入れられることはなかった。

この後、ペッタツォーニによって行われた基調講演の内容紹介、学会参加者の内訳や、各部会の発表者などの報告、およびドイツ支部の活動報告が論評抜きで続く。

ペッタツォーニの基調講演では、「本学会は純粋に学問的・非教派的な性格を持つ。それゆえ、参加者は様々な宗教・教会に属しているか、いずれにも所属していない。だが、みな個々の信仰は異なるが、宗教(die Religion)というものが学問的施策の対象でありうるし、またそうでなければならないという点についての信仰(Glaube)は共有されている」と指摘

³³ VIII. Internationaler Kongress für Religionsgeschichte in Rom, 17.-23.4.1955. *ThLZ* 80, 1955, S.683-696.

があり、さらに宗教 (die Religion) とはいかなるものかについての説明が続く (宗教の本来の目的は人類の救済にある, など)。そして、宗教概念を拡張することの必要性を主張し、宗教史の学会を「リベラリズムの大いなる実験」とする。

IAHR 大会が「ローマ」で開催されたことの意義は (ローマ・カトリック教会と対立しながらもカトリックへの「郷愁」を絶ちがたかった) ハイラーにとって大きかったはずである。ハイラーの認識によれば、ローマ大会は (その土地柄から) 西洋宗教の研究が課題とされ、またそれは純粋に学問的な性格を持つものであった。また、ペッタッツォーニの基調講演紹介において、ハイラーの関心と重なるであろう指摘は、宗教学者が「宗教」(die Religion) への信仰を共有している、ということ、そして宗教概念を (キリスト教を超えて) 拡張することの必要性である。これらは、後にハイラーが主張することになる宗教学の課題、すなわち「諸宗教の協働や統一」へと展開していく。

4.4. IAHR 東京大会報告

次に、1958 年 IAHR 東京大会報告³⁴の内容を紹介する。この報告は、マールブルクの地元紙 (Oberhessische Presse) に掲載されていたものだ。つまり、専門家向けではなく、一般市民向けの文章である。そのタイトルに記されているように、東京大会についてだけでなく、その前に開催されたローマ大会についての記述もあり、両者を対比的に紹介する内容が含まれている。例えば、次のような紹介である。「1955 年 4 月、世界中から多くの学者がローマに集まり、人類の宗教に関して、熟慮を重ねた末の研究成果を交換した。フォーカスされたのは神聖な王権という現象であった。それは過去の宗教にとって最も重要であったが、現在ではわずかな残骸しか見出せない。ローマとその周辺にある数多くの宗教的モニュメントもまた過去を示している。ローマ大会とは対照的に、今年の東京での『宗教史国際会議』は、はるかに現代的で実生活に関連したものであり、その主なトピックは、東洋と西洋の宗教の歴史的関係であった」。この部分では「学問と宗教」という対立軸において、ローマ大会から東京大会にかけて、前者から後者に比重が移った、という認識が示されている。この後の部分では日本の研究者の紹介 (日本には宗教哲学者が多い, など)、大会の様子などの報告がなされる。学術大会に関してだけでなく、ユネスコの協力によるシンポジウムにも言及がある。すなわち、「純粋に学問的なプレゼンテーションと議論に引き続き、ユネスコ支援下での「シンポジウム」が開催され、現在の東西世界間の交流が、個別に、また全体として扱われた。この記事の著者 (ハイラー) は東洋の宗教が西洋の知的世界に与える影響について語った。このようにして、歴史的研究は人々と宗教の間の相互理解に即効性を持って役立つこととなった」。こうした記述からもわかる通り、ハイラーは自らの学問的活動が実践的な役割を果たしていることを自覚していた。それゆえ、東京大会における宗教学の「実践性」(東西交流) をハイラーは評価し、その後、そうした傾向はマールブルク大会へと継承されていくこととなる。ちなみに「東西の出会い」はかつてハイラーが参加していたエラノス会議でのテーマでもあった。そして、この報告はマールブルク地元民へのマールブルク大

³⁴ Rom-Tokio-Marburg. Drei internationale Kongress für Religionsgeschichte!. *Oberhessische Presse*, 11.10.1958.

会協力のお願いで終わっている。これは、掲載されたのが、地元紙であるが故だろう。

なお、今回は、紙幅の都合上十分には扱えないが、戦後になって増えるのが、諸宗教の協働に関する論文である。例えば、以下のようなものがある。

-Um die Zusammenarbeit der Christenheit mit den ausserchristlichen Religionsgemeinschaften. *Schweizerische Theologische Umschau* 22, 1952, S.1-11.

-"Mut zur Liebe"- Die Zusammenarbeit der Religionen im Dienste der ganzen Menschheit. *EhK27/I*, 1953/54, S.18-33.

-How can Christian and Non-Christian Religions co-operate? *The Hibbert Journal*, LII, 1954, pp.3-14.

-Von der Einheit der Religionen. Die Zusammenarbeit der Christenheit mit den ausserchristlichen Religionsgemeinschaften als religioese Aufgabe. *Bulletin der Indischen Botschaft*, Nr.12, 1954, S.1-10.

-Um die Zusammenarbeit der Christenheit mit den ausserchristlichen Religionsgemeinschaften. *Mitteilungen des Instituts fuer Auslandsbeziehungen* 5, 1955, Heft1/2 Jan./Feb.

-Ein Weltbund der Religionen. *Freies Christentum*, Nr.11, 1957, S.139ff.

-Unity and Collaboration of Religions. *News Digest of the International Association for Liberal Christianity and Religious Freedom* No.35, Autumn, 1957, pp.4-7.

4.5. 東京大会終了後のアジア旅行

1958年8月24日から1959年5月24日まで、ハイラーはアジア諸国を旅して回った。このアジア旅行に先立ち、ハイラーはIARF（国際宗教自由連盟）の第15回国際大会に参加した。この組織は、1900年5月25日にボストン（マサチューセッツ州）で設立された、最も古い国際的な「諸宗教間団体」である。当初は、宗教的不寛容に反対する「ユニテリアン及びその他の自由主義宗教者の国際評議会」という名称で設立された。初代会長は、オックスフォード大学マンチェスター・カレッジで教鞭をとっていたイギリスの神学者・宗教学者ジョセフ・エストリン・カーペンターである。1893年にシカゴで開催された世界宗教者会議の開催に尽力したアメリカ・ユニテリアン派の聖職者、チャールズ・ウェンドが20年間、事務局を務めていた。

IARF大会に続いて、ハイラーは東京と京都で開催された第9回IAHR大会に参加し、「宗教の統一への道としての宗教史」と題した基調講演を行う。大会後は、エクスカージョンに参加し世界各国の宗教研究者と14日間を過ごした。さらに、ハイラーはさらに3ヵ月間、日本に滞在（58.8.26～58.11.21）し、その後、香港、ベトナム、カンボジア、タイ、インドなど12カ国を訪問した。その際の（ハイラー自身による）記録が残っており、出版もされている³⁵。

この記録から、まずハイラーの日本仏教や神道への関心を見ておく。ハイラーは元々、仏教への関心はあった（教授資格論文「仏教の瞑想」（1918）など）。だが、この日本滞在時に

³⁵ Tworuschka, Udo (Hrsg.), *Friedrich Heiler; mit einer Prosopographie herausgegeben von Udo Tworuschka, Rundbriefe der Ostasien- und Indienreise*, Frankfurt/Main, Lembeck 2004.

は総持寺など、多くの仏教寺院を訪問し参禅体験を重ねている。また、神道に関しては、伊勢神宮などを訪問した。しかし、神道については、「原始的」という評価が目立っている。その理由のひとつとして、神道の雅楽などを、好まなかったことがある。ハイラーは、次のように述べている。神道は「あまり趣味に合わない。神社に入るときは靴を脱ぐだけでなく、『儀式的に浄化される』ために手を水ですすぐ（実は口もすすぐ）」、「私自身、いくら心が広いと言っても、この宗教が非常に原始的な性格を持っているため、抑制されてしまう」。

次に日本のキリスト教の評価を見ておく。ハイラーは日本滞在中にキリスト教団体の礼拝・ミサに頻繁にも数多く参加している。そして、日本（や中国）におけるキリスト教の「西洋化」を何度も批判しているのである。ハイラーは、日本のキリスト教教会に「日本らしさ」が感じられないことへの不満を述べる。例えば「昨日の朝、私は東京で最も美しいカトリック教会と言われている聖イグナチオ教会を訪れた。そして私はひどく失望した。マリア像やイエスの聖心像、祈祷台などに日本的な精神は微塵も感じられない。（中略）典礼を執行する司祭（背格好からして、明らかに禁欲的な顔をしたドイツ人のイエズス会士）は、非常に流暢に、非常に美しい日本語で説教をした。この完全な「西洋化」に、私は体を痛めた。状況は、東方正教会であれ、ローマ・カトリックであれ、プロテスタントであれ、すべてのキリスト教の宗派でも同じであり、みな輸入された西洋のキリスト教に他ならない」。

また、キリスト教以外の宗教に関するハイラーの報告書の記述には、自身のキリスト教（主にカトリック）の伝統に基づく現象との比較が含まれている。例えば、ハイラーは（日本に限らず）アジアの宗教現象を説明するとき、キリスト教用語を頻繁に用いる。トゥウォルシュカは、ハイラーのそうした姿勢に対して、宗教の同一視、類比に関して、配慮が足りないのではないかという評価を下している。例えば、ハイラーは日本の宗教組織（例えば仏教教団）について説明をする際、修道士、修道院長、大修道院長、司祭などの用語を用いるし、仏教における教典の朗読は、「カトリックの修道院で行われている詩篇の朗読とそっくり」と認識する。さらに仏教教団の宗教行事は「礼拝」とされ、住職はアルバを着用し、「その上に白絹、金刺繍のカブラを身につけ、ミトラのような頭巾をかぶる」、「日蓮宗の特徴は、純血主義であることだ。仏教徒は敬虔なカトリック教徒のように（中略）左手にロザリオを巻いている」。ハイラーは、日蓮宗の信者が指導者と日常的に交わす会話に（カトリック教会で見られる）「告白のようなもの」を見ているし、仏教寺院（永福寺）の住職や僧侶の家庭生活は、ハイラーにはプロテスタント的に見えている。（ここでの生活は）「プロテスタントの牧師館に似ていた」³⁶。

戦後のハイラーの活動として諸宗教の協働は重要なテーマであった。それは学術的であるだけでなく、実践的な活動でもあった。そして、IAHRの東京大会とマールブルク大会の間をつなぐのが、東京大会後のアジア旅行であった。そこでは、宗教者との実践的な交流が行われた。ただし、その実践的な交流とは、キリスト教的（カトリック的）な認識原理により、アジアの諸宗教を「理解」することであった。諸宗教の協働や統一と宗教学の役割に関する数々の論文において、ハイラーはアジアの諸宗教を評価し、さらには賞賛しているように見える。だが、その内実には問題が含まれる。それは、実践的活動そのものに問題があっ

³⁶ 以上の記述は、Tworuschka, Udo (Hrsg.), *Friedrich Heiler.....*, S.16-18

たというよりも、その実践的活動を支える認識原理に問題があったということである。ハイラーのアジアの評価・賞賛とは、(1) そこに自分(たち)と同じ(ような)ものがあり、(2) しかもそれがアジアらしくあること、に対する評価・賞賛であった。そして、(3) アジアらしいものの中に、(1) 自分たちと同じようなものの存在を見抜くことが宗教学の役割とされたのである。

4.6. 小結

ローマ、東京、マールブルクという戦後 IAHR の「流れ」にハイラーは関わっていた。その「流れ」とは、大きく言うと学術的大会から実践的活動へというものである。ただしそれは、研究発表そのものが実践的になっていったというよりも、研究活動に加えられた実践的活動をハイラーが評価し、むしろそこに IAHR の意義を見いだしていったということであろう。

ハイラーの宗教運動家としての側面に注目すれば、とりわけ礼拝・典礼改革への関心という点で戦前の活動には(『祈り』の出版とそれ以降の活動において)一貫性が見られる。また、そうした実践的関心は戦後の IAHR マールブルク大会まで継承されていると考えられる。IAHR マールブルク大会で、大会参加者に自身の作り上げたミサへの参加を呼びかけたことなどは、その現れと言えよう。さらに、戦後の IAHR へのコミットを通じて、ハイラーは東西交流という実践的課題へと向かっていった。本章で紹介した、日本を含む東アジア諸国訪問などがその好例であろう。ただ、そうした活動においても、彼の狭義の宗教学的営為と同様の批判、すなわち「キリスト教中心主義」的な姿勢への批判が存在する。その点においても、彼の研究活動と実践活動は重なり合っているとと言えるだろう。

5. まとめ

本稿では、主に 1920 年代から 50 年代にかけてのハイラーの活動を紹介し、分析した。これまであまり注目されてこなかった資料も用いて、従来、宗教学的/宗教的と区別されがちであった彼の活動について、両者を結びつけて考察することを試みた。これまでキリスト教神学的として批判されてきた彼の活動への評価は、あくまで宗教学/キリスト教神学という図式に基づいての判断である。だが、カトリックでもプロテスタントでもないハイラーの宗教的立場性から生み出された「宗教学」は、若き日に著した主著『祈り』で示された宗教の本質を実現するための営為として、実践的なものとなっていった。本稿では、そのプロセスを明らかにすることを目指した。長い期間にわたって、多様な問題関心を持ちつつ幅広い領域にわたっているように見える彼の営為は、その実、彼自身の宗教的理想の実現に向けた、一貫した活動であったことがわかる。それは間違いなく宗教学史の中に位置づけられる独自の営為であって、「キリスト教神学的であった」という評価で切り捨てられるものではないと考えられるのである。

参考文献

Bleeker, Claas Jouco, Die Bedeutung der religions-geschichtlichen und religions-pänomenologischen

- Forschung Friedilch Heilers. *Numen*, XXV, 1978, S.2-16.
- Flasche, Reiner, Religionsmodelle und Erkenntnisprinzipien der Religionswissenschaft in der Weimarer Zeit. Cancik, Hubert (Hrsg.), *Religions- und Geistesgeschichte der Weimarer Republik*, Patmos, Düsseldorf 1982, S.261-276 (「ヴァイマル時代の宗教学における宗教のモデルと認識原理」フーベルト・カンツイク編, 池田昭・浅野洋監訳『ヴァイマル共和国の宗教史と精神史』御茶ノ水書房, 1993, 379-380 頁) .
- Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religions-psychologische Untersuchung*, Reinhardt, München 1918 (5.Aufl. 1923).
- , Die Absolutheit des Christentums in der allgemeinen Religionsgeschichte. Vortrag in der Religionswissenschaftlichen Gesellschaft zu Stockholm (1919). *ChrW*, Vol.34, 1920, S.226-230, 244-248, 258-262.
- , *Das Wesen des Katholizismus. sechs Vorträge, gehalten im Herbst 1919 in Schweden*, Reinhardt, München 1920.
- , *Der Katholizismus. Seine Idee und seine Erscheinung*, Reinhardt, München 1923.
- , Sadhu Sundar Singh, der Apostel Indiens. *ChrW*, Vol.37, 1923, S.417-483.
- , Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz. *Hochkirche*, Vol.7, 1925, S.359-363; Vol.8, 1926.
- , Evangelische Hochkirchentum. Vortrag auf der Tagung der Hochkirchlichen Vereinigung in Magdeburg 1.Dezember 1925. *Hochkirche*, Vol.8, 1926, S.2-16, 36-46, 68-74.
- , Die religioese Einheit der Stockholmer Weltkonferenz. *ChrW*, Vol.39, 1925, S.865-875.
- , *Im Ringen um die Kirche (Gesammelte Aufsätze und Vorträge, Band 2)*, Reinhardt, München 1931.
- , Eucharistiefeier der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft. *Hochkirche*, Vol.13, 1931, S.145-162.
- , *Die katholische Kirche des Ostens und Westens, II,1: Altkirche Autonomie und päpster Zentralismus*, Reinhardt, München 1941.
- , *Der Vater des katholischen Modernismus - Arfred Loisy(1857-1940)*, Ernst-Reinhardt-Buecherreihe. Erasmus-Verlag, München 1947.
- , *Mysterium Caritatis. Predigten fuer das Kirchenjahr*, Ernst-Reinhardt-Buecherreihe. J.&S. Federmann-Verlag, München 1949.
- , VIII. Internationaler Kongress für Religionsgeschichte in Rom,17.-23.4.1955. *ThLZ* 80, 1955, S.683-696.
- , Rom-Tokio-Marburg. Drei internationale Kongress für Religionsgeschichte'. *Oberhessische Presse*,11.10.1958.
- , *Erscheinungsformen und Wesen der Religion*, W. Kohlhammer, Stuttgart 1961.
- Langfeldt, Jan, *Die hochkirchliche Bewegung in Deutschland und die Eucharistiefeier der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft von 1931: Unter besonderer Berücksichtigung des Offertoriums*, Grin Verlag, München 2007.
- Mensingh, Gustav, *Gesichte der Religionswissenschaft*, Universitätsverlag, Bonn 1948 (下宮守之

訳『宗教学史』創造社, 1970) .

Misner, Paul (Hrsg.), *Friedrich von Hügel – Nathan Söderblom – Friedrich Hailer: Briefwechsel 1909-1931*, Bonifatius-Druckerei, Paderborn 1981, S.309.

Niepmann, Helmut Martin, Professor Friedrich Heiler und die Hochkirchliche Vereinigung. Haut, Theodor / Kisker, Ursula (Hrsg.), *Siebzig Jahre Hochkirchliche Bewegung (1918-1988). Hochkirchliche Arbeit. Woher? – Wozu? – Wohin? (Eine heilige Kirche NF 3)*, Bochum 1989, S. 55-89.

Rudolph, Kurt, Die Problematik der Religionswissenschaft als akademisches Lehrfach. *Kairos*, Vol.9. S.22-42.

宮嶋俊一『祈りの現象学—ハイラーの宗教理論』ナカニシヤ出版, 2014。

——「宗教現象学批判とその後」『宗教研究』第91巻別冊, 2018, 173-174頁。

——「ワイマール共和制期ドイツの宗教学と宗教運動」『宗教研究』第95巻別冊, 2022, 98頁。

——「ハイラー宗教学再考」『北海道大学文学研究院紀要』(168), 2022, 37-54頁。

——「ドイツ高教会運動とハイラー宗教学の形成」『北海道大学文学研究院紀要』(172), 2024, 93-105頁。